山形大学人文社会科学部研究年報　第22号（2025. 3）99－109

資　料

山東直砥『新撰山東玉篇　英語挿入』について

中　澤　信　幸

0　はじめに

『新撰山東玉篇　英語挿入』（1878年刊，明治11，以下『新撰山東玉篇』と略称）は，紀州出身の役人，実業家で教育者でもあった山東直砥（1840～1904）によって編纂された漢字字書である。『新撰山東玉篇』はジャイルズ（H. A. Giles）の辞書『A Chinese-English Dictionary』（1892年刊）でもその書名が見られる[1]が，それ以外にはほとんど知られておらず，言語学・日本語学の学界でもその存在が紹介されたことはない。

本稿はこの『新撰山東玉篇』に光を当て，その字書の性格や典拠，さらには後世への影響についても，あきらかにしようとするものである。

1　山東直砥と『新撰山東玉篇』

1．1　山東直砥について

山東直砥は1840年（天保11）紀州和歌山生まれ。12歳の時に僧侶になるべく高野山へ行くも，翌年には脱走。20歳の時に父の死に際して還俗，山東一郎と名乗る。以後も勤皇の志士として諸国を渡り歩き，坂本龍馬や同郷の陸奥宗光と出会う。29歳の時，明治維新に際して箱館裁判所の外国事務権判事に任命されるも，翌年には辞任。学校経営に携わる。33歳の時，直砥と改名。神奈川県令となった陸奥宗光に呼ばれて神奈川県に出仕。翌年には神奈川県参事となる。36歳の時に県参事を辞職し，以後は実業家として活躍する。1904年（明治37），65歳で死去。

山東は出版事業にも力を入れており，薔薇楼という出版社の運営に携わった。『新撰山東玉篇』

1　ジャイルズの序文 pp.xxx-xxxi には，日本の漢音と呉音に関連した以下のような記述がある。

Both the *kan-on* and the *go-on* are usually given under this scheme, for all characters, when there really are two forms; usually the *kan-on* is printed first, but I am sorry to say that I did not set out by adhering to this arrangement; students must guess for themselves which is which. This is partly because I do not always know which is which myself, and partly because the Japanese dictionaries are not always consistent. It does not follow that both forms are actually used in Japan; the information given is purely theoretical. Both forms are in the large majority of cases taken from a Japanese work called the 山東玉篇 , but occasionally also from HEPBURN or from memory.（下線は筆者による。）

ここでは「山東玉篇」の他，「HEPBURN」の名も見られる。これはヘボン（J. C. Hepburn）の『和英語林集成』を指すのであろう。

もこの薔薇楼から出版されている。山東39歳の時である[2]。

１．２　『新撰山東玉篇』の書誌

『新撰山東玉篇』は初め和本で分売発売され，後に１冊にまとめて洋本にしたと言う[3]。洋本は活版で縦193mm ×横142mm。(四六判よりやや大きい。）ページ数は全部で1,190である[4]。

本扉（**図１**）には以下のような記載がある[5]。

山東直砥増補　　（検印）（検印紙）

新撰山東玉篇英語插入

明治十一年九月印行

それに続いて，巌谷一六（明治政府の高官で後に貴族院議員，漢学者）による題字，野口松陽（太政官少書記官）による序文，中村敬宇（正直，啓蒙学者，『西国立志編』『自由之理』の翻訳者）による序文，およびフレデリック・ディキンズ（Fred. V. Dickins，イギリスのバリスター弁護士）の英語による序文と日本語訳がある。

さらに，「凡例附索字例」「新撰山東玉篇索引」「檢字」「古文檢索」「籀文檢索」があり，その後の漢字字書本文（**図２**）は1,084ページに及ぶ。字書本文の大尾には

佐藤劉二
本多省三　　校

とある。

最後に奥書および「薔薇楼藏板目錄」がある。奥書には以下のような記載がある。

明治九年九月四日版權免許　定價金二圓

神奈川縣士族
増補者　　山東直砥
神奈川縣下第一大區二
小區老松町三十四番地
東京府平民
出版人　　稲田佐吉
東京府下第一大區八小
區卅間堀二丁目五番地

図1　『新撰山東玉篇』本扉

2　山東直砥の生い立ちについては，中井けやき（2018a）（2018b）に詳細な記述がある。
3　中井（2018a）p.313参照。
4　筆者所蔵本による。(2023年4月に東京の bangobooks より購入。）この本の冒頭遊び紙には「舊和歌山徳川氏藏」の印がある。また「索引」の pp.3-6，「檢字」の pp.3-4および pp.7-10を欠く。
なお，ハーバード大学所蔵本の画像が Google ブックスのサイトで公開されている。
5　原文はすべて縦書きである。以下同じ。

同

出版人　　坂上半七

同第一大區六小區

呉服町十二番地

書肆　　大坂　柳原喜兵衛

前川善兵衛

松村九兵衛

梅原龜七

東京　北畠茂兵衛

稲田佐兵衛

山中市兵衛

丸家善七

北澤伊八

小林新兵衛

吉川半七

長野龜七

図2　『新撰山東玉篇』字書本文 p. 1

以上から，『新撰山東玉篇』は明治９年（1876）には版権を得ていたものの，実際の刊行は明治11年（1878）になったことがわかる[6]。

２　凡例と索字例

２．１　凡例

「凡例附索字例」ではまず８項目の凡例を示し，その後に「附索字例」を示す。凡例の内容はおおむね以下の通りである。(原文は文語体の漢字片仮名交じり文。)

一　世間で売っている字書の種類は多いが，旧版では印刷が不鮮明で校訂も不充分である。今この書は厳正に訂正を加え，鉛版を使って印刷することで，字画は鮮明で間違いがないようにしている。

一　この書は訂正にあたってひとえに『康熙字典』に拠っている。しかしその文字に音と意味がともにないもの，音だけのもの，意味だけのものは一切除外し，それ以外の４万余りを完全に載せる。ただし籀文古文は別に巻首に抄録する。

一　旧本ではいたずらに字数が多く，またみだりに同一の文字を複数回出していた。例えば「肇」は戸部・攵部・聿部に，「朷」は木刀両部に載せ，かつその音と意味を換えており，

6　この間，山東は西南戦争に連動した政府転覆事件（立志社陰謀事件）に巻き込まれ，拘留を恐れて表立った活動を控えていたという。中井（2018a）pp.265-273参照。

乱れている。これらをことごとく削除し，単一にした。

一　音訓は務めて五音（五十音）を正し，「お・を」「い・ゐ」等の間違いがないようにした。また英訳を挿入したのは，洋語を学ぶ者の便とするためである。

一　古来字義訓釈の当たっていないもの，例えば「嵐」をアラシ，「霞」をカスミ，「柏」をカシハなどと呼ぶようなものが少なくない。しかし，今にわかに直すことはできない。しばらく字訓に〔 〕括弧を施すことで，これを区別する。

一　字音は右にあるのを漢音，左にあるのを呉音とする。四声は圏点を四隅に施すことで示し，相当する韻字を左側に記す。声韻が転換するものは，おのおの訓義にて詳しく示す。すべて旧本の例に従う。

一　従来の漢字字書では繁雑な検索方法に苦しんだ。これは漢字の体がそうさせているのだが，守旧の陋習である。この書では工夫して簡単に検索できるようにした。「索字例」を付してこの検索方法に慣れるようにしている。

一　この書はもっぱら検索を簡単にしようとしている。字画を３種類に分けたのも，そのためである。これは私が新たに創出したもので，その牽強臆断ぶりは極めて僭越で罪深いものである。しかし数千年来の陋習を除き，将来の学者への利益を与えようとする老婆心を，やめてもよいのであろうか。

２．２　索字例

凡例に続く索字例の内容は，おおむね以下の通りである。（原文は文語体の漢字片仮名交じり文。）

一　この書では，文字を偏旁画数によって検索することは，他の字書と同じである。ただし，さらに点画で分けて３種類とする。すなわち「一」「丨」「丿」である。その画数内の字数が僅少な場合には，またこれを類別することはしない。

一　文字はまず某部某画にあるのを知り，その後画数の起筆（書き始め）によってこれを検索する。例えば「梧」を検索する場合は，木部７画で「吾」の起筆「一」類にある。また「渠」を検索する場合は，氵部９画で「巨木」の起筆「丨」類にある。また「絢」を検索する場合は，糸部６画で「旬」の起筆「丿」類にある。これで他は類推できるはずである。もしその画数内を検索しても見つからない場合には，その前後の画数を検索するとよい。

一　字画の起筆は時折難しいものがある。そのため，おおよその類例を示す。

○「刀」「匚」「十」「尢」「尺」「弓」「阝」「戈」「廾」「比」「癶」「示」「也」「脊」「武」等の字は「一」類に属す。

○「亠」「宀」「小」「巾」「艸」「心」「戸」「丬」「肉」「皿」「臣」「門」「韋」「黹」等の字は「丨」類に属す。

○「冖」「冫」「厶」「女」「氵」「斗」「斤」「月」「火」「片」「疋」「非」「叔」等の字は「丿」類に属す。

以上の「一」「丨」「ノ」による漢字の検索方式は，『新撰山東玉篇』独自のものと言える[7]。

3　字書本文

3．1　注の内容

字書本文では，漢字それぞれに以下のような注を付ける。例として冒頭の「一」について記す。（**図3**）

1段目―見出し漢字	一
漢字の右側―漢音	イツ
漢字の左側―呉音	イチ
漢字の四隅の○点―声調	入声
左上―上声　右上―去声	
左下―平声　右下―入声	
呉音注のさらに左側―韻	質
2段目―訓	カズノハジメ、モツハラ、スクナシ、ヒトツ、ヒトシ、
3段目―訓の続き	オナジ、マコト、キハマリ、姓
4段目―英語注釈	The beginning of numbers; one, few; at once.

音，韻，声調，訓に続いて，英語の注釈も入れているところが，この『新撰山東玉篇』の特徴である。以下，「一」「命」「帽」「第」の4字（**図3～6**）について，江戸時代および明治時代の他資料と対照していくことにしよう。

3．2　音注

『新撰山東玉篇』では，漢字の音を漢音と呉音に分けて示している。この漢音・呉音が江戸時代の漢字音研究や「字音仮名遣い」をどのように受け継いでいるのか，興味が持たれるところである。そこで，この漢音・呉音について，文雄『磨光韻鏡』（1744年刊，延享元），太田全斎『漢呉音図』（1815年成，文

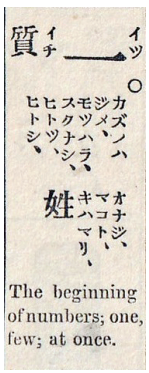

図3　『新撰山東玉篇』「一」（p.1）

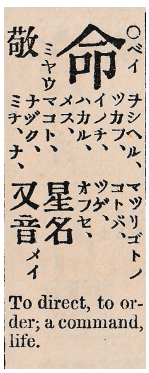

図4　『新撰山東玉篇』「命」（p.70）

図5　『新撰山東玉篇』「帽」（p.182）

図6　『新撰山東玉篇』「第」（p.554）

7　この方式は，アメリカのA. D. グリング（Ambrose Daniel Gring）が著した『Eclectic Chinese-Japanese-English Dictionary』（『対訳漢和英字書』，1884年刊，明治17）にも引き継がれているという。惣郷正明（1982）p.160参照。
なお，この検索方式は漢字の起筆を基準としているが，そもそも漢字の筆順は明治時代初期の段階では確立してはいないはずである。漢字の筆順の歴史との関連についても，検証する必要があろう。

化12)，白井寛蔭『音韻仮字用例』(1860年刊，万延元)[8]の漢音・呉音との対照を行う[9]。また明治時代の資料として，『新撰山東玉篇』よりも後のものとなるが，『漢和大字典』(重野安繹・三島毅・服部宇之吉監修，亀井忠一編輯，1903年刊，明治36，三省堂)[10]との対照も行う。以上を一覧にしたのが**表1**である。

「一」は舌内入声韻尾「-t」をどのように転写するかが問題となるが，いずれも漢音「－ツ」・呉音「－チ」となっている。『磨光韻鏡』以来の字音仮名遣いが明治時代以降も忠実に受け継がれていることがわかる。

「命」は明母に属する字で，字音仮名遣いでは漢音バ行・呉音マ行とされるものである。ただし，実際の漢音では，「-ŋ」など鼻音韻尾を持つ字は（バ行ではなく）マ行で現れることが多い[11]。『新撰山東玉篇』では，字音仮名遣いを承けて漢音「ベイ」・呉音「ミヤウ」とするが，さらに「又音」として「メイ」も併記している。この「又音メイ」は他の明母字（「明」p.285，「名」p.65）にも見られるが，この注記は後の「慣用音」にもつながるものとして注目される[12]。

「帽」は豪（皓・号）韻脣音に属する字である。豪韻は日本漢字音では通常「-au」で現れるが，脣音字については「ホウ・ボウ・モウ」のように「-ou」で現れていた。それが江戸時代の字音仮名遣いでは，脣音字も「ハウ・バウ・マウ」のように（他の声母に合わせて）「-au」に変えられる[13]。漢音「-au」・呉音「-ou」と棲み分けがなされたのは太田全斎以降と考えられるが，『新撰山東玉篇』でもこれを承けて漢音「バウ」・呉音「モウ」としている。

「第」は斉（薺・霽）韻に属する字で，実際の日本漢字音では漢音・呉音とも「-ei」「-ai」両形で現れていた。それが，江戸時代の字音仮名遣いでは漢音「-ei」・呉音「-ai」と整理されるものである[14]。『新撰山東玉篇』でも，これを承けて漢音「テイ」・呉音「ダイ」としている。

いずれも，『新撰山東玉篇』は江戸時代の字音仮名遣いを忠実に受け継ぎ，さらに後世の『漢和大字典』にもつながっていると言える。ただし，「命」の「メイ」の扱いについてはユレが見られる。

表1　「一」「命」「帽」「第」の音注

掲出字	新撰山東玉篇	磨光韻鏡	漢呉音図	音韻仮字用例	漢和大字典
一	漢音イツ 呉音イチ (p.1)	漢音イツ 呉音イチ (十七転)	漢音$_{次音}$イツ 呉音イチ (十七転)	漢音$_{次音}$イ$_{ヤ行}$ツ 呉音$_{次音}$イ$_{ヤ行}$チ (図6ウ)	漢音イツ 呉音イチ (p.1)

8　いずれも人間文化研究機構国立国語研究所所蔵本（Webサイト公開の画像）による。
9　『漢呉音図』『音韻仮字用例』では，漢音・呉音とも「原音」「次音」に分けて分析的に示している。(「原音」を反切と見なして得られるのが「次音」。)
10　山形大学附属図書館蔵本による。なお，国立国会図書館デジタルコレクションで画像が公開されている。
11　有坂秀世（1940）参照。
12　「慣用音」を明記した最初の漢字字書は，『新訳漢和大辞典』(三島毅・大槻文彦監修，濱野知三郎輯著，1912年刊，明治45，六合館）と考えられる。中澤信幸（2019）参照。
13　有坂秀世（1941）参照。
14　中澤信幸（2009）参照。

命	漢音ベイ 呉音ミヤウ 又音メイ （p.70）	漢音ベイ 呉音ミヤウ （三十三転）	漢音$_{次音}$ベイ 呉音$_{原音}$ミヤウ （三十三転）	漢音$_{次音}$ベイ 呉音$_{原音}$ミヤウ （図32オ）	漢音メイ 呉音ミヤウ （p.158）
帽	漢音バウ 呉音モウ （p.182）	漢音バウ 呉音マウ （二十五転）	漢音$_{次音}$バウ 呉音$_{次音}$モウ （二十五転）		漢音バウ 呉音モウ （p.353）
第	漢音テイ 呉音ダイ （p.554）	漢音テイ 呉音ダイ （十三転）	漢音$_{原音}$テイ 呉音$_{原音}$ダイ （十三転）		漢音テイ 呉音ダイ （p.1022）

３．３　訓注

次に，『新撰山東玉篇』の訓注について見ていくことにしよう。

凡例では,「この書は訂正にあたってひとえに『康熙字典』に拠っている」と述べていた。したがって，訓注を付けるにあたっても，『康熙字典』（1716年刊）の漢文注を参照していたことは想像に難くない。

ここでは『新撰山東玉篇』より後世のものになるが，『袖珍軽便康熙字典』（大塚子成編，1902年自序，明治35,1908年第６版刊，明治41，田中宋栄堂）[15]，および『漢和大字典』の訓注との対照を行う。以上を一覧にしたのが**表２**である。

これを見ると，『新撰山東玉篇』の訓注は，『康熙字典』をもとに編纂されたと考えられる『袖珍軽便康熙字典』と，共通する部分が多いことがわかる。一方，より近代的な漢字字書とも言える『漢和大字典』の訓注は，前２書より複雑で詳細である。とはいえ，内容としては前２書を承けているところもある。

表２　「一」「命」「帽」「第」の訓注

掲出字	新撰山東玉篇	袖珍軽便康熙字典	漢和大字典
一	カズノハジメ、モツハラ、スクナシ、ヒトツ、ヒトシ、オナジ、マコト、キハマリ、姓（p.1）	ハシメ　モツパラ　スクナシ　ヒトタビ　ヒトツ　ヒトヘ　ヒトリ　ヒトシ　ヒト　ツラ　オナジ　マコト　ヒト　ツラ（上1オ）	一　ひとつ。　二　ひとたび。　三　ひとつびとつ、いちいち。四　對なきこと、最も勝れてあること。五　もはら、もっぱら　六　まこと、（誠）。七　おなじ、ひとし、（均）。八　わづか、すくなし、（少）。九　ある、（或）。十　全き、すべての、みな。(p.1)
命	ヲシヘル、ツカフ、イノチ、ハカル、メス、ミヤウマコト、ナヅク、ミチ、ナ、マツリゴトノコトバ、ツゲ、オフセ、星名(p.70)	ヲシヘル　ツカフ　イノチ　ハカル　メス　マコト　ナヅク　ミコトノリ　ミチビク　マツリゴト　カナラス　姓名（上60ウ）	一　使に同じ、つかふ。二　教諭、政令、敕語、告示、誓戒、任免、其の他すべて尊者より卑者にある事を爲さしむるに下したる言の稱、みことのり、のり、をしへ、しめし、つげ、いましめ、おほせ、まうしつけ。三　尊者より卑者に或る事を爲さしむるために言を下すにいふ字、のる、をしふ、つぐ、いましむ、しめす、おほす、まうしつく。四　政令盟會の辭、教戒告示の文、官吏任免の書、すべて尊者より或る事を卑者にまうしつくる文書。五　自然の暦數、天道の配

15　早稲田大学図書館蔵本（Webサイト公開の画像）による。なお，例言によれば，この書は橋爪寛一編『訓蒙康熙字典』（1882年刊，明治15）を訂正することで編纂されたと言う。

			劑、窮達吉凶の際會、生死慶弔の遭遇、めぐりあはせまはりあはせ、かず、うん。六　天地の間に生息し得る性元又は生息し得る際限、いのち。七　天より人への付與。八　みち、(道)。九　天子の諸侯を封じ又は諸侯の繼位を承認する證として與ふる圭玉。十　官服。十一　名を附く、なづく。十二　住民たる證として其の地の官府の簿籍に姓名を記載しあること、名籍。十三　指名する處、まと。十四　はかる、(計)。十五　めす、(召)。(pp.158-159)
帽	カシラヅヽミ、(p.182)	カシラツヽミ（上140ウ）	古昔支那にては、冠を著くる下地に用ひたるかしらづヽみより變じて、其の高さを高くし爵位ある者の燕居、又は、輿に乗る時に用ひ、庶民は、常に用ひたるかぶり物、轉じて、すべてのかぶり物、かしらづヽみ、ゑぼし、づきん。(p.353)
第	イヘ、タダ、ツイデ、ツイヅル、シナ、シタガフ、(p.554)	イヘ　タヾ　ツイデ　ツイヅル　シナ（下3ウ）	一　次序、ついで。二　科級、しな。三　ついでを定む。しなさだめをなす。四　ついでにならぶ、しなに入る。五　弟に同じ、したがふ、(順)。六　たゞ、(但)。七　館宅、やしき、いへ、其の甲乙のついであるよりいふ。八　物事のついでを記するに用ふる字。(p.1022)

３．４　英語注

最後に，『新撰山東玉篇』の特徴でもある英語注について見ていくことにしよう。同時代の英語辞書としては，ヘボン（J. C. Hepburn）の『和英語林集成』があまりにも著名である。ここでは『新撰山東玉篇』の英語注と，『和英語林集成』再版（1872年刊，明治５）および第３版（1886年刊，明治19）との対照を行う。以上を一覧にしたのが**表３**である。

これを見ると，『新撰山東玉篇』と『和英語林集成』とでは，必ずしも内容は一致していないことがわかる。特に「帽」については，『新撰山東玉篇』の「kerchief」という語は，『和英語林集成』にはいっさい出てこない。「第」についても，『新撰山東玉篇』の「house」という語は，『和英語林集成』には出てこない。『新撰山東玉篇』の英語注は，『和英語林集成』とは異なる文献または訳者に拠っているものと考えざるを得ない。

なお，『新撰山東玉篇』の訓注（和訓）では，「帽」は「カシラヅヽミ」，「第」は「イヘ」とあり（**表２**），これをそれぞれ「kerchief」「house」と逐語訳した可能性がある。他にも「一」の「カズノハジメ」→「The beginning of numbers」，「命」の「ヲシヘル」→「To direct」など，訓注から逐語訳した可能性がある。

表３　「一」「命」「帽」「第」の英語注

掲出字	新撰山東玉篇	和英語林集成再版	和英語林集成3版
一	The beginning of numbers; one, few; at once.（p.1）	I-CHI, イチ , 一 , (*hitotsu.*) One; first, prime, whole.（p.152右）	I-CHI イチ 一（*hitotsu*）One; first, prime, whole:（p.186右）
命	To direct, to order, a command, life.（p.70）	MEI, メイ , 命 , *n*, Life, fate, destiny; command, order, decree.（p.308左）	MEI メイ 命 n. Life, fate, destiny; command, order, decree;（p.386左）
帽	A kerchief.（p.182）	BŌSHI, バウシ , 帽子 , *n*, A cap or bonnet worn by old men or priests, also a white cap made of raw cotton, worn by the bride at her wedding, and by the women at funerals.（p.38右）	BŌ ボウ 帽 n. A hat.(p.41左) BŌSHI バウシ 帽子 n. A cap or bonnet worn by old men or priests; also a white cap made of raw cotton worn by the bride at her wedding, and by the women at funerals; a hat or cap.(p.44左)
第	A house, a rank; only.(p.554)	DAI, ダイ , 第 , The ordinal prefix.（p.55左）	DAI ダイ 第 The ordinal prefix;（p.65左）

４　『新撰山東玉篇』の位置付け

４．１　先行文献からの影響

まず音注であるが,『新撰山東玉篇』が江戸時代の字音仮名遣いを承けていることは確実である。明治時代の漢字字書が，江戸時代の漢字音研究，特に漢音・呉音の枠組みをどのように受け継いでいるのかは，まだまだ未解明である。その意味で，『新撰山東玉篇』は，江戸時代の漢字音研究と明治時代の漢字字書との過渡期に位置するものとして，重要な資料となり得る。

次に訓注であるが，『新撰山東玉篇』は凡例にも名を挙げる『康熙字典』をもとに，訓注を付けている可能性がある。明治時代には『袖珍軽便康熙字典』など，他にも『康熙字典』を承けていると考えられる字書がいくつか出ている。『新撰山東玉篇』の訓注を検証する上では，明治時代の『康熙字典』の受容実態についても考察していく必要があろう。

最後に英語注であるが，『新撰山東玉篇』は少なくとも，同時代の『和英語林集成』に拠っているわけではないようである。幕末･明治初期の英語資料，例えば『英華字典』（ロプシャイド編，1866～1869年刊）や『英和対訳袖珍辞書』（堀達之助編，862年刊，文久２）などとも対照しながら，さらに検証していく必要があろう。

４．２　後世に与えた影響

冒頭でも述べたように，『新撰山東玉篇』はジャイルズ『A Chinese-English Dictionary』にその書名が見られる。ジャイルズが何らかの形で『新撰山東玉篇』を参照していたことは，想像に難くない。

当時の『康熙字典』受容にも関係していることは，前述した通りである。ここから，後世の『漢和大字典』のような，近代漢字字書にも影響を与えている可能性があるが，これはさらに検証していく必要があろう。

5　おわりに

以上，『新撰山東玉篇』の内容と，他文献と対照した結果について述べてきた。この『新撰山東玉篇』自体が学界では未紹介であったが，一方で，明治時代の漢字字書編纂の流れについても，まだまだ考察は不充分である。近代漢字字書が江戸時代以来の研究をどう受け継ぎ，それが現代に至るまでどう発展していったのか，さらに解明される必要があろう。その中で，『新撰山東玉篇』がどう位置付けられるかも決まってくるが，これらはすべて今後の課題としたい。

引用文献

有坂秀世（1940）「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」『音声学協会会報』64，『国語音韻史の研究　増補新版』所収，pp.369-374，1957，東京：三省堂

有坂秀世（1941）「「帽子」等の仮名遣について」『文学』9-7，『国語音韻史の研究　増補新版』所収，pp.263-282，1957，東京：三省堂

惣郷正明（1982）『辞書とことば』，東京：南雲堂

中井けやき（2018a）『明治の一郎　山東直砥』，東京：百年書房

中井けやき（2018b）『明治を駆けぬけた紀州人　山東直砥』，東京：百年書房

中澤信幸（2009）「斉韻字に対する字音注の変遷について」『国文学攷』202，pp.1-14，東広島：広島大学国語国文学会

中澤信幸（2019）「「俗音」考」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』16，pp.59-70（右pp.1-12），山形：山形大学大学院社会文化システム研究科

付記　本稿は「山形県ことばと文化研究会令和６年度研究発表会」（2024年９月16日）での研究発表がもとになっている。発表時には多くの方から有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

本稿は令和６年度～令和８年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金，基盤研究(C)（一般），研究課題名：明治期漢字字書における漢字音と東アジアへの展開，課題番号：24K03910，研究代表者：中澤信幸）による研究成果の一部である。

山形大学人文社会科学部研究年報　第22号（2025. 3）99－109

A Study of Santō Naoto's New Santō Compilation with Appended English

Nobuyuki NAKAZAWA

New Santō Compilation with Appended English（新撰山東玉篇英語挿入）, published in 1878, is a sinogram dictionary compiled by Santō Naoto（1840-1904）, a government official, entrepreneur and educator from Kii Province. The title, rendered as 山東玉篇, is mentioned in H. A. Giles' *Chinese-English Dictionary* of 1892, but otherwise it is almost entirely unknown, even in the fields of linguistics and Japanese studies. This paper sheds light on the work, examining its character, sources and potential influence on later works.

In the *New Santō* each sinogram is annotated both with readings（Chinese *kan-* and *go-on*, Japanese *kun*）and English glosses. The Chinese readings adhere faithfully to the *jionkanazukai* transcription system of the Edo period, while the *kun* readings may have been based on the *Kangxi Dictionary* of 1716, as they share many features with the later *Portable Kangxi Dictionary*（preface dated 1902）. The English glosses, however, do not align with those in Hepburn's *Japanese-English Dictionary*, which had been revised in 1872 and later published in its third edition in 1886. It is possible that the English glosses were literal translations of the *kun* readings.